

# 病害虫発生特殊報 第1号

富山県農林水産総合技術センター所長

## タバココナジラミ バイオタイプQの発生について

### 1 病害虫名：タバココナジラミ バイオタイプQ

学名：*Bemisia tabaci* (Gennadius) Q-biotype

英名：Sweetpotato whitefly Q-biotype

### 2 作物名：トマト

### 3 発生経過

- (1) 2011年10月下旬に、富山市の施設トマトほ場でコナジラミ類の幼虫及び成虫を採取し顕微鏡で観察したところ、タバココナジラミと疑われ、(独)農業・食品産業技術総合研究機構 野菜茶業研究所に同定を依頼したところ、マルチプレックスPCR法とミトコンドリアDNAのCO1領域の配列解析による遺伝子診断で、本県では未発生のタバココナジラミ バイオタイプQであることが判明した。
- (2) 本種はトマト黄化葉巻病の病原ウイルス及びウリ類退緑黄化ウイルスを媒介することが知られているが、これらのウイルス病の発生は現在のところ確認されていない。

### 4 防除対策

- (1) 苗を購入する際は、本種の寄生が無い健全苗であることをよく確認する。
- (2) 施設栽培では、施設開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットを設置して、成虫の侵入を防ぐ。なお、細かな目合いのネットを使用する際は、温度管理に注意する。また、周囲に光反射資材を設置すると侵入防止効果がより高まる。
- (3) 施設内外に黄色粘着トラップを設置して本種の発生を観察し、発生初期の防除に努める。
- (4) 本種にはネオニコチノイド系薬剤の一部やピリプロキシフェン剤に対して感受性の低い系統の存在が報告されているので、農薬を使用する際は農林振興センター等に相談の上で実施する。なお、薬剤抵抗性の発達を防止するため、同一系統の薬剤の連用はしない。
- (5) ほ場内及び周辺の雑草や野良生えのトマトは本種の発生源となるため、除草と野良生えのトマトの抜き取りを徹底する。
- (6) 作物残渣や抜き取った寄主植物等は土中に埋設、ビニール被覆するなど適切に処理する。

(7)施設栽培で本種が発生した際は、周辺への飛散防止のため、栽培終了後に施設を密閉して蒸し込みを行う。

## 5 参考（タバココナジラミ バイオタイプQについて）

### (1)国内外での発生状況

- ・タバココナジラミは世界中に広く分布しており、現在、我が国では在来系統(JpL、Nauru)の他に、侵入系統(バイオタイプ B、バイオタイプ Q)が確認されている。それらは、遺伝子解析により区別が可能である。
- ・本種(バイオタイプQ)は 1996 年にスペインで初確認された。国内では平成 17 年(2005 年)に宮崎県で初確認され、その後急速に分布が拡大し、現在 1 都 2 府 38 県で発生が確認されている。

### (2)形態

- ・成虫は体長が約 0.8 mm、翅は白色、体は淡黄色で、静止した時、両翅の角度が 45° で中央が高くなる。オンシツコナジラミに比較してやや細く、体色が濃い。
- ・4 齢幼虫は体長が 0.7~1.0 mm、体色は黄色~淡黄色、体高は薄く、後部がやや細い楕円形で、背面がやや隆起する。一方、オンシツコナジラミの幼虫は乳白色の楕円形で、毛が多く、ハンバーグ型である。
- ・成虫及び幼虫の形態はタバココナジラミ在来系統、タバココナジラミ バイオタイプ B との差異は認められていない。

### (3)寄主植物並びに被害

- ・本種(バイオタイプQ)の寄主範囲は広く、ナス科、ウリ科、アブラナ科等々、30 科 64 種(飯田ら、2009 年)の寄主植物が記録され、様々な作物で被害が確認されている。
- ・成虫及び幼虫の吸汁による寄主植物の生育阻害、分泌物による葉や果実の汚れ、分泌物にすす病が発生すると汚れはさらにひどくなる。また、トマトなどでは着色異常果の発生原因ともなる。
- ・トマト黄化葉巻病の病原ウイルス及びウリ類退緑黄化ウイルスを媒介する(本県では未発生)。

問合せ先	農業研究所 病理昆虫課
TEL 076-429-5249	FAX 076-429-7974